はじめに

英語を話すための一般的な法則とは何でしょうか．この自問自答が本書の出発点にありました．長年，英語をうまく的確に，しかも論理的に話すにはどうすれば良いのか，あらゆる機会を捉えてその方法を明らかにしようと取り組んできました．その間，さまざまな試行錯誤を続けてきたのは言うまでもありません．読者の皆さんにも恐らく同じような経験がおありでしょう．

例えば，英語を話すために役に立つ表現を覚え，繰り返し音読練習を行い，役に立つ表現を実際の場面で活用するということをごく当たり前のこととして実践してきた方も多いと思います．その結果，日常会話を身につけ，2文，3文（3語〜8語程度を用いた文）程度の英語だったら言えるという自信もついてきたに違いありません．これだったら外国旅行に行くにも大丈夫だし，不十分だけれども相手の言っていることも分かるようになっています．しかし，少し長めの英文を話すことになるとできないことが時々あるかもしれません．また相手を説得し，相手の言っていることに論理的に抗弁するなどの，少し込み入った内容になるとどうもうまくいかないかもしれません．果たしてこのままで良いのか不安だけが頭をよぎり，どうすれば良いのか悩んでしまいます．

仮に読者の皆さんがこのような状況だったら，どのような対策を講じれば良いとお考えでしょうか．おそらく，その原因は語彙や専門用語が不足しているのではと想像するのではないでしょうか．また，その場にふさわしい表現方法を知らないために思うように議論を進めることができないとも想像するのではないでしょうか．しかし筆者としては，次のような点を提案したいと思います．

それは，英語を話すためには，話すことのみを学習するだけではなく，それ以上に英語を読み，**英語を書いていく**ことがなければならないということです．まとまった内容を話す前には，その内容を一度文章化することが有益に働くということを理解しなければいけないと私は考えています．この理由についてはこのあと詳しく見ていきます．

筆者は，冒頭で述べているような英語学習が無駄であるとか，役に立たないと

か言うつもりはまったくありません. しかし, これまで英語に対して長くつきあってきましたが，やはり英語は書けなければいけないということが次第に分かってきました．しかもただ書けるだけではなく，より効果的にあるいはより論理的に英文が書けなければあまり意味を持たないことが理解できるようになりました．

そこで本書では，副題にあるように**「英語が書ければ英語は話せる，英語が書ければ英語の論理が分かる」**を基本理念に掲げ，理論・実践を通して英語のライティングを身につけられるようにしました．そのために多くの演習問題を用意しました．また英語を分かりやすく論理的に理解してもらえるように，英文法を始めとした英語のライティングで欠かすことのできない背景知識を，理論編としてさまざまな観点から取り上げています．また本書では理論に重点を置き，その上で英語の表現技法を身につけるといった手法をとっています．

さて言わずもがなですが，英語のライティングを考える上で英文法は大事な要素の一つです．文法のない言語は存在しません．本書ではこの事実に鑑み，従来の学校文法を基本としながらも，**「認知言語学」**のさまざまな知見を英文法学習の一つのアプローチとして導入していきます．そのことによって，文法がより分かりやすくなり，「なぜそうなのか」の疑問に答えることができるようになります．それに，従来の英文法の底流に流れている背景は何か，その実体を解き明かすことにもきっと役に立つはずです．その上，**「人はどのように自分の外的世界や内的世界を捉えているのか」**ということを明らかにしていくという大きな可能性にもチャレンジしていくことができます．つまり，これまで人は世界をどのように言葉として切り取っているのか，言語化してきたのかという観点から英文法を捉え直していくことができるということです．いわば，パラダイムの転換です（**構造主義的言語観→認知主義的言語観**　詳細は後述します）．**その結果，英語がより一段と書きやすくなります．**

また，**コミュニケーション**時代の到来と言われて久しいのですが，これまでは，コミュニケーションをどう定義し，どのように効果的に展開していくかといった議論はあまり行われてきませんでした．そのため，**コミュニケーション能力（communicative competence）**の養成（言語を正しく理解し，状況に応じ

て適切に用いる能力の養成）と言いながらも，実際には，場面や機能に根ざした英語の定型表現を発話するという単調な訓練になってしまい，必ずしも自発的な発話行動にはならなかったようです.

しかも現在，英語教育界では，前述のコミュニケーション能力の養成を目標にした**コミュニカティブ言語教授法（Communicative Language Teaching: CLT）** にどうも振り子が振り切れてしまっていて，「英語は間違えてもいいからとにかく口に出して言ってみましょう」という掛け声が聞こえてきそうです．しかし，本当に言いっぱなしでよいのでしょうか.

英語を話すにもそれなりの内容を含む英語でなければ聴衆は耳を傾けてくれませんし，逆に言いたい放題だけの「コミュニケーション」だけでは十分ではないはずです．そうなると，質・量ともに内容のある話でなければ十分とは言えないはずです．そこでこの問題を解決するためには，英語を書くことで思考力を身につけ，理路整然と英文を書いていくことが大変重要なのです．その恩恵は計り知れないものがあります.

このように，従来の**話すことを中心とした英語の勉強方法から，書くことを中心とした勉強法に**徐々に方向転換しなければいけないという思いを筆者は強くしているのです．書くことを英語学習の中心に据えて，自分の考えや思いを明文化していくことが重要だということです．いったん英語を書くことによって，論理的に筋道を立てて，自分の話したいことを積極的に文字言語化し，それを音声化すればりっぱなスピーチとなるでしょう．また，英語を書くことで論理構成をしっかり組み立てることができ，ディベート思考や critical thinking の力を養うことができるでしょう．これは，いわば一石二鳥の勉強方法なのです.

以上述べましたことを振り返りながら，本書によって**「何が身につき，何が可能となるのか」**をまとめておきましょう.

(1) 従来の英語を話すための方策だけでは成し得ない，**真の意味での話す力**を身につけることが可能となります.

(2) いわゆる「英語会話」に見られる対話文や 2 文，3 文（3 語～8 語程度を用いた英文）のレベルを超え，**英語の論理性を追究した本格的な「英語のライティング能力」（いくつかのパラグラフから成る英文を書く能力）**を身

につけることができます.

(3) 本書では，英語の表現技法のことを**「自ら表現する能力を産み出す力」**と定義し，情報の送り手，また受け手としてのいずれの立場からも，**論理的思考を積極的に駆使しながら，効果的に英語を組み立て，英語を書いていく力**を身につけていくことを目指していきます．そうすることによって，効率のよい論理性に富んだライティング力の習得を始めとする学習モデルの構築を目指していくことが可能となります．さらにこれを突き進めていくと，英語のライティングのみならず言語の 4 技能の他の面においても**波及効果**があると言えます.

(4) 英語学習における 4 技能のバランスを充分取りながらも，私たち日本人にとって望ましい英語学習のあるべき姿を追い求めていくときの手順として，どうしても**英語ライティングを学習の中心に据えた「学びの形態」を考えることが必要となります**．具体的には，Ⅰの総論編にて英語ライティングの大枠を学び，次にⅡの各論編にて「英語編成能力としての文法」を学ぶことによって，その「学びの形態」を考えていきます．その結果，従来の学校英文法を新たな視点から再構築していくことが可能となります．また，語彙力向上のための具体的な学習方法，さらには文章構成力向上のための有効な手だてを獲得することが可能となります．その後，Ⅲの演習・応用編へと学習を進めることによって，文字通り**理論から実践へ**と着実に英語ライティングを学ぶことができます.

(5) 英語教育に携わっておられる先生方には，自らの学習の助けとなるばかりではなく，勤務されている学校の置かれている教育環境，学習環境に鑑み，本書で示されている提示方法・学習方法を咀嚼（そしゃく）していただくことによって，積極的に活用していただくことができます**（汎用性が期待できます）**.

(6) 本書では，**認知言語学の知見**から多くのヒントを得ることによって，英語ライティングのための「新しい手がかり」を手に入れることができます．また，実際に演習問題を通してライティング力を磨くことによって，英語力の向上を実感していただけるものと確信しています．さらに，今まで以上に，英語ライティング力アップを目指していこうとされている高校生や

大学生，また一般読者の皆様方にも大いに参考になる内容となっています．

ぜひ，本書によって**「英語は書くことを中心に学んでいく」**ということがどういうことなのかを知り，また理論的な裏付けをしっかりしていただき，その上で英語を書くことを楽しんでいただければ幸いです．本書がそのための一助となればこれに優る喜びはありません．

なお，本書で用いている英文は，いくつかの例文を除き，すべて私のオリジナルです．誤りや思い違いがあるかも知れません．大方のご叱正をお願いいたします．また，本書を中学校・高等学校・大学の英語学習の一編として是非とも参考にしていただき，ご意見等々をお聞かせ願えれば誠に幸いです．

川村正樹

ワンランク上をいく英語ライティング

—英語が書ければ英語は話せる，英語が書ければ英語の論理が分かる—

目　次

はじめに……i

Ⅰ　総論編　現在の英語教育の問題点と「書く」力の必要性……1

1　英語ライティング教育の新しい切り口　2

2　改訂前の学習指導要領における英語ライティング　3

実際の英語ライティング授業

3　文科省新学習指導要領を読み解く（22年5月発行高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編より抜粋）　8

「英語表現Ⅰ」「英語表現Ⅱ」が目指すものは何か

4　なぜ「書く」のか①

（コミュニケーションの中での「書く」ことの位置づけ）　11

5　なぜ「書く」のか②

（論理的な英語にする上での「書く」ことの位置づけ）　14

英語の論理って何だろう／なぜ我々は英語の論理が苦手なのか／「論理」のまとめ／英語ライティングで「論理」を鍛える

Ⅱ　各論編……23

0　各論を論じるにあたって　24

（1）　英語を紡ぎ出す力とは何か？　24

（2）　構造言語学 vs. 認知言語学　25

心的表象と情報処理

1　いわゆる「文法力」について　28

（1）　英文編成力としての文法　28

（2）　英文法の全体的な姿　29

英文法の全体像をどう捉えるのか／「プロダクト（産物）としての文法」

（3）　英文法で何を教えるのか　32

英文法の授業展開方法

（4）　指導手順のまとめ　40

2　語彙力について　43

（1）　単語の文法を知ろう　44

語彙文法／文脈に依存しない意味／「make」の文脈に依存しない意味を考える

（2） 単語の意味を知ろう（意味はどこにあるのか） *50*

単語の多義性／単語の意味拡張／「視点」によって異なる単語

（3） 単語の語法を知ろう *56*

冠詞の働きに注意！／冠詞の働きと役割／ゼロ冠詞

3　文章構成力について *58*

（1） チャンクとチャンキング

—チャンクの世界をどう捉え結びつけるのか— *58*

名詞チャンク／名詞チャンク中の冠詞の位置／冠詞以外の限定詞の名詞チャンク中の具体的な位置／名詞の直後につけるチャンクのいろいろ／動詞チャンク／副詞チャンク

（2） パラグラフ *70*

パラグラフの構成はこうする

（3） 英文の種類と表現技法 *76*

英語の表現技法を知る／説明文／物語文／描写文／論証文

（4） 英語における論理的構成 *87*

（5） 要約 *89*

Ⅲ　演習・応用編 …… *93*

1　英語表現技法を使って実際に英文を書いてみる *94*

1. 定義／ 2. 比較・対象／ 3. 分類／ 4. 因果関係／ 5. 例証／ 6. 過程を表す文／7. 物語文／ 8. 描写文／ 9. 論証文

2　英語のスピーチを書いてみる *163*

（1） 英語のスピーチを書く *163*

（2） 英語のスピーチを書くための第一歩は何か *164*

（3） 英語スピーチを書く上で，重要な理論はこれだ *166*

スピーチの目的と発表形式／スピーチの目的と構成

3　目的に応じた英語スピーチを書いてみる *171*

説得するスピーチ／行動を起こさせるスピーチ

4　ディベートの立論を書くための必要前提条件 *175*

はじめに／私たちが目指すべきディベートとは何か／ディベートの基本形式／

ディベート（競技ディベート）の基本手順とマナー／論題について／おわりに

5　ディベートの立論を書く時に考えること
—ディベートの立証責任と論題—　*188*

ディベートの立証責任／論題の具体例

6　「政策論題」を扱うディベートの立論を書いてみる　*189*

立論（Constructive Speech）を書く（1つのケース）／プランの提示／プランの問題解決性／プランのメリット／否定側の反論

おわりに …… *197*

参考文献 …… *200*

邦文索引 …… *203*

欧文索引 …… *205*